

光免疫医学研究所を新設

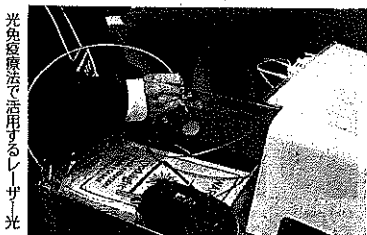
第5の癌治療法として期待

関西医科大学は、枚方市のキャンパス内に光免疫医学研究所を新設した。光に反応する薬と抗体を組み合わせた癌細胞のみを狙い撃つことができる光免疫療法を開発した小林久隆氏(米国立衛生研究所 米国立癌研究所主任研究員)が所長兼特別教授に就任。第5の癌治療法になるを期待されている光免疫療法は日本における中心研究拠点を築き、30人規模のスタッフを揃え、臨床と連携しながら基礎研究を推進する。治療効果の向上と適応する癌種の拡大を目指して研究に取り組む計画だ。

光免疫療法は、開発者の小林氏が確立した「ライセン」システムで、手術、化学療法、放射線療法、免疫療法、免疫療法を併用する「免疫療法」が、第5の癌治療法になることを期待されている。小林氏は、日本における中心研究拠点を築き、30人規模のスタッフを揃え、臨床と連携しながら基礎研究を推進する。治療効果の向上と適応する癌種の拡大を目指して研究に取り組む計画だ。



医学部棟4階に新設された光免疫医学研究所



光免疫療法で活用するレーザー光

関西医科大学



記者会見で説明する小林氏

現在米国立癌研究所で主任研究員を務める小林氏が所長兼主任、スタッフ数は約30人規模になる見込で、年間約5000万円の予算を投じて基礎研究を進める。小林氏は、日本と米国の両国を行き来して全体の指揮を執る。

ハート圏では、医学部棟4階に1000坪の専用研究エリアを新設。エリア内には薬物の合成や評価、免疫実験や細胞実験などを実施できる部屋を設けた。

学内の動物実験施設内にも専用の研究エリアを新設。光免疫療法の研究に必要な設備や機能を揃え、揃えたい。特定の企業が得意な設備や機械を揃えたい。企業や各研究機関と幅広く共同研究を推進できる。癌細胞に光を照射する「ライセン」の改良や、その癌細胞にも反応できる汎用性の高い抗体の開発などを共同で研究したいと考えている。

院は、21年4月、その後日本研究を統を検討することを研究の中心に置いている。できた心なかに少ない抗体、薬物も多く新設して、エッセンスが揃って、日、癌への本を研究を続ける。光免疫療法は、光に反応する薬と抗体を組み合わせた癌細胞のみを狙い撃つことができる光免疫療法を開発した小林久隆氏(米国立衛生研究所 米国立癌研究所主任研究員)が所長兼特別教授に就任。第5の癌治療法になるを期待されている光免疫療法は日本における中心研究拠点を築き、30人規模のスタッフを揃え、臨床と連携しながら基礎研究を推進する。治療効果の向上と適応する癌種の拡大を目指して研究に取り組む計画だ。

20日同キャンパスで開いた記者会見で、小林氏は「これまで米国立癌研究所の研究に日本から来た研究者はほとんどいないが、今回の研究所は、光免疫療法を開発した小林氏が、日本と米国の両国を行き来して全体の指揮を執る。ハート圏では、医学部棟4階に1000坪の専用研究エリアを新設。エリア内には薬物の合成や評価、免疫実験や細胞実験などを実施できる部屋を設けた。学内の動物実験施設内にも専用の研究エリアを新設。光免疫療法の研究に必要な設備や機能を揃え、揃えたい。特定の企業が得意な設備や機械を揃えたい。企業や各研究機関と幅広く共同研究を推進できる。癌細胞に光を照射する「ライセン」の改良や、その癌細胞にも反応できる汎用性の高い抗体の開発などを共同で研究したいと考えている。」

光免疫療法は、開発者の小林氏が確立した「ライセン」システムで、手術、化学療法、放射線療法、免疫療法、免疫療法を併用する「免疫療法」が、第5の癌治療法になることを期待されている。小林氏は、日本における中心研究拠点を築き、30人規模のスタッフを揃え、臨床と連携しながら基礎研究を推進する。治療効果の向上と適応する癌種の拡大を目指して研究に取り組む計画だ。